

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370755

研究課題名(和文) アムール川下流域で生産された装飾品及び外来交易品の周辺諸民族への波及に関する研究

研究課題名(英文) Studies Regarding the Propagation to Surrounding Peoples of Ornaments Created in the Lower Amur (Heilong) Basin and External Trade Commodities

研究代表者

東 俊佑 (AZUMA, Shunsuke)

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：30370224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ハバロフスク、ニコラエフスク・ナ・アムール、ボゴロツコエ、ブラワーの博物館等の資料所蔵施設において、金属製の飾り物や中国製絹織物等交易活動に係る物質文化資料の所在状況、種類、大きさ、数量等の基本的情報の集積を行った。アムール川下流域やサハリンに住む人びとの交易活動は、20世紀になっても継続され、交易のあり方も変容した。文字で書かれた記録からはわからない交易の実像を、残された物質文化資料からさぐることができた。

研究成果の概要(英文)：I have gathered fundamental information regarding trade-related material culture goods including metal ornaments and Chinese-made textiles stored at facilities such as museums in Khabarovsk, Nikolayevsk-on-Amur, Bogorodskoye, and Bulava. Our data includes location, type, size, and quantity. The trade with inhabitants of regions such as the lower Amur Basin or Karafuto continued even into the 20th century, albeit in a different form. The true nature of this trade cannot be determined from written record. I examined the remaining material culture items.

研究分野：日本史

キーワード：交流史 北海道史 北方諸民族

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 歴史学における聴き取り調査、物質文化資料調査からのアプローチ

文献資料(史料)に記された情報から過去を復元・再構成する歴史学にとって、無文字社会の歴史の描写には、種々の困難な課題が付きまとう。研究代表者がこれまで研究対象としてきたアムール川下流域・サハリンは、ナナイ、ウリチ、ニヴフなど文字を持たない諸民族の生活空間であった。そのため、彼らの歴史の研究には、日本語やロシア語、中国語・満洲語といった外来諸言語文献の活用が必要となる。17~19世紀頃、「サンタン人」と呼ばれた人たち(主に現在のウリチ民族をさす)が、アムール川下流域からサハリン島南端までを移動し、清朝(満洲)と日本(松前藩・江戸幕府)・アイヌの間の中継取引を行っていた事実は、上記諸語文献に見える具体的事実をつなぎあわせて形作られた歴史事象である(いわゆる「サンタン取引」)。

研究代表者はかつて、日本のくずし字史料(古文書)から幕末期のサンタン取引と江戸幕府の対応について論じたことがある(東俊佑「幕末のサンタン取引について」『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史 北方文化共同研究報告』北海道開拓記念館、2010年)。これは佐々木史郎氏(『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人—』日本放送協会、1996年)や、松浦茂氏(『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学出版会、2007年)などロシア語、満洲語、日本語(活字史料)による先行研究を土台に、蝦夷地・北海道の視座から、北方地域に住む人びとの歴史を考察したものであった。研究代表者は、文献資料からのアプローチに限界を感じ、若手研究(B)「聴き取りと物質文化資料の調査による日本列島北方域の取引変容に関する包括的研究」(2010-2012年度)の交付を受け、サハリン北部に住むニヴフの古老へのインタビューや、現地の博物館に収蔵される取引品(絹製品や金属製の飾り物、古銭など)の調査により、17~20世紀における北方諸民族の取引活動の解明を試みた。その研究結果については、今年度の研究紀要で公表する予定である。しかし、この研究を通じて得た何よりの成果は、物質文化資料の調査が、無文字社会の歴史復元にかなり有効であるとの感触を掴んだことであった。

### (2) 物質文化資料調査の継続と発展

ナナイ、ウリチ、ニヴフなど諸民族の衣装には、主として真鍮を原材料とする小型の装飾品金具が付けられている。一方、これらの衣装の生地をこまかく見てみると、清朝(中国)渡来の絹の切れを使用している物がある。前者の装飾品金具は、サハリンのウイльтаやアイヌの民族衣装にも見られる。これは諸民族間の取引により彼らにもたらされた結果と考えられる。2012年6月のハバロフスク調査で、この金具にはロシアや中国で精巧に加工されたものと、ナナイの民族村にお

いて簡易な鑄造技術により生産されたものの二種類あることがわかった。すなわち、現地生産物と外来交易品の二種である。一方、後者の絹製品は、「蝦夷錦」の名で知られ、サンタン人が北方経由で日本社会にもたらした取引品である。ナナイの民族衣装には、日本にも伝わった赤地牡丹や紺地龍文の絹生地をパッチワークのように縫い合わせて製作したものや、清朝の官服に似せて紺の絹地の上から龍を刺繍して製作したものを確認できる。一方で、龍文を織り込んだ外来(中国渡来)の絹製品も同時に見られる。すなわち、外来取引品とそれを現地で加工した物の二種が存在すると言える。

アムール川下流域からサハリンにかけての無文字社会の歴史を記録した文献資料はきわめて少ない。とくに近代以降は文献記録が乏しい。通説的理解では、19世紀中頃の江戸幕府の崩壊、露清間の北京条約によるアムール川下流域からの清朝の撤退によって、諸民族間の取引活動は途絶したとされている。しかし、上述の物質文化資料は、近代以降にアムール川流域で生産・加工され、諸民族間の取引によりサハリンへ波及した可能性がある。この仮説を裏付ければ、通説として考えられてきた従来の取引像が大きく転換することになる。

## 2. 研究の目的

研究代表者の研究の最終目的は、文献記録では見えない北方諸民族間の取引の実像に迫ることである。本研究課題は、物質文化資料の調査と研究により、その目的を達成するための土台を3年間で固めることを目的としている。本研究では、数ある取引品(物質文化資料)のなかから、金属製飾り物と中国渡来の絹地の二種類に調査対象を限定する。この二種は、ともに「衣服を着飾る」という側面を有しており、調査の簡素化という点では民族衣装調査への収斂、学術的成果という点では、民族衣装の変化や影響の考察に特化できる。取引品には、煙管、ガラス玉(青玉)、古銭等もあるが、これらも含めると、考察や作業が多面にわたる。確実に成果をあげるためには、調査対象を絞り込む必要がある。ナナイ、ウリチ、ニヴフの民族衣装に使用される金属製飾り物、絹地の形態(色・形・文様の有無)に関するデータを集積し、サハリンや日本国内に残存するウイльтаやアイヌなどサハリン周辺諸民族の衣装と比較検討することが具体的作業である。これにより、研究代表者が立てた仮説の裏付けをとることが本研究課題の具体的目的である。

## 3. 研究の方法

本研究の具体的作業は、(1)物質文化資料の調査、(2)周辺諸民族への文化的波及の考察、の二つである。

(1)を行うにあたって、平成25年度は、事前準備として以下の作業を行った。

研究代表者が平成 24 年度（研究実施前）に調査した金属製飾りと中国製絹織物を用いた衣服の写真データを整理し、サハリンや日本国内に残存する資料との比較検討を行った。検討対象とした写真は、ハバロフスク郷土博物館、及びコムソモリスク・ナ・アムール芸術博物館の収蔵品である。金属製飾りについて、サハリン北部ネクラソフカに残存しているものと比較したところ、形状や大きさが非常に類似していることがわかった。また中国製絹の布地を用いた衣服を綿密に分析したところ、さまざまな切れを継ぎはぎしているものがあり、そのなかに日本国内に残存する「蝦夷錦」の切れと共通しているものが含まれていることがわかった。

前近代における諸民族の装飾品のあり方を把握するため、民族衣装が記された絵画資料の調査を函館市中央図書館、及び東京大学史料編纂所にて行い、《蝦夷島奇観》や《北夷分界余話》の挿し絵などとの比較を行った。函館市中央図書館では、19 世紀初頭の会津藩のカラフト警備に関する《文化五年会津藩唐太出陣絵巻》及び《唐太嶋奇覧》の調査を行い、画像データを収集した。また東京大学史料編纂所では、幕末期の箱館奉行・村垣範正の蝦夷地巡視に関する《北蝦夷地図》《甲寅蝦夷巡撫図》《西蝦夷地図抄》の調査を行い、画像データを収集した。

続く平成 26 年度には、以下の調査を行った。平成 26 年 9 月 2 日～14 日、ロシアのハバロフスク、ニコラエフスク・ナ・アムール、ポゴロツコエ、ブラワーで調査を行った。調査は、榎森進氏（研究協力者、東北学院大学名誉教授）とともに 2 名で行った。ハバロフスク州郷土博物館、ニコラエフスク市立郷土開拓博物館、ポゴロツコエ村ウリチ地区郷土博物館では、中国製の絹織物、金属製飾り等の交易に関する物質文化資料を収蔵庫から出納してもらい、資料の計測と写真撮影を行った。一部、資料カードの閲覧が可能なものについては、写真撮影を行った。ブラワー村ウリチ民族芸術学校では、村在住のウリチ民族の方数名に、ご自宅に保存されている資料を持参していただき、計測、写真撮影とともに、聴き取り調査を行った。そして、調査終了後、データの分析を行った。資料 1 点ごとの計測値を入力し、形状・大きさにより分類を行った。また、ロシアや中国の研究機関・博物館が発行する図録等に掲載されている写真と調査資料写真を比較しながら、資料の同定を行った。

平成 27 年度は、(2)を行うにあたって、過去の国内・海外調査の成果を踏まえ、基本文献や先行研究の読み込み、及び分析を行い、年度末に研究代表者の勤務する職場（博物館）の展示会（特別展、及びクローズアップ展示）において、研究成果の一部を展示するという形式で、成果の公表を行った。本研究の分析対象の一つである（衣装等に吊り下げ）金属製の下げ飾りについては、平成 26

年度の調査において、アムール川下流域のポゴロツコエ村、ブラワー村、ニコラエフスク・ナ・アムール市においても、サハリンやハバロフスク市に所在するものと同系統のものが確認され、アムール川下流域からサハリンにかけての広範な範囲における物の移動、交易の実態が示唆された。平成 27 年度に翻訳を行ったロシア語文献

（「  
」）においても、中国人や満洲人を媒介とした交易の様子、アムール川下流域の諸民族自身による再鑄造による下げ飾りの製造の事実が指摘されており、調査の成果を裏付けるものとなった。

もう一つの分析対象である中国製絹織物については、平成 26 年度の調査において、赤地・紺地牡丹文の切れを発見した。これを今年度、関連する文献や国内所蔵資料と比較検討したところ、非常によく似た切れが「蝦夷錦」として日本国内の軸物の軸装や衣装の一部に縫い合わされていることがわかった。

#### 4. 研究成果

本研究では、ハバロフスク、ニコラエフスク・ナ・アムール、ポゴロツコエ、ブラワーの博物館等の資料所蔵施設において、金属製の飾り物や中国製絹織物等交易活動に係る物質文化資料の所在状況、種類、大きさ、数量等の基本的情報の集積を行った。その結果、金属製飾りについては、アムール川下流域に中国人やロシア人の手を経て現地住民にもたらされた物、あるいは現地住民が自製（再鑄造）した物が、19～20 世紀ごろのアムール川下流域・サハリン地域の住民間の交易により、サハリンに波及していることがわかった。また、中国製絹織物については、清朝とアムール川下流域住民の朝貢関係のなかで住民に下賜または交易によりもたらされた物が、17～19 世紀の「サンタン交易」、あるいは 20 世紀の住民どおしの交易により、サハリン、さらには北海道にもたらされたことがわかった。文字で書かれた記録からはわからない交易の実像を、物質文化資料の調査により明らかにすることができた。

また、調査の過程で明らかになったことを、下記に示す発表論文や学会発表等の形で随時公表した。

研究成果のうち、中国製絹織物の蝦夷地への波及に関することについては、勤務先（北海道博物館）のクローズアップ展示（入替展示コーナー）において、「北のシルクロード―サンタン交易をさぐる」と題して成果の公表を行った。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

(1) 東俊佐「クナシリ・メナシの戦いと『夷

曾列像』(『夷曾列像-蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』、査読無、北海道博物館、2015年9月、pp.72-79)

(2)東俊佑「近世蝦夷地交易品ノート(2)-和人からアイヌへの交易品について-」(『北方地域の人と環境の関係史 研究報告』、査読無、北海道開拓記念館、2015年3月、pp.47-96)

(3)東俊佑「アムール川下流域住民の交易活動に係る物質文化資料について-2014年度ボゴロツコエ、フラワー調査報告-」(『北海道開拓記念館研究紀要』第43号、査読無、北海道開拓記念館、2015年3月、pp.67-88)

(4)東俊佑「村垣家所蔵の蝦夷地巡視関係卷子本について」(『東京大学史料編纂所画像史料センター通信』第66号、査読無、東京大学史料編纂所、2014年7月、pp.10-15)

〔学会発表〕(計3件)

(1)東俊佑「幕末期の場所経営帳簿にみる漆器」(漆器とアイヌの社会・文化、北海道札幌市、2015年10月)

(2)東俊佑「蝦夷地のころ-交流と交易」(平成26年度室蘭市文化財講演会、北海道室蘭市、2014年11月)

(3)東俊佑「会津藩のカラフト警備」(北海道開拓記念館歴史講座、北海道札幌市、2013年8月)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

東 俊佑 (AZUMA, Shunsuke)

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：30370224

### (2)研究協力者

榎森 進 (EMORI, Susumu)

東北学院大学・文学部・名誉教授